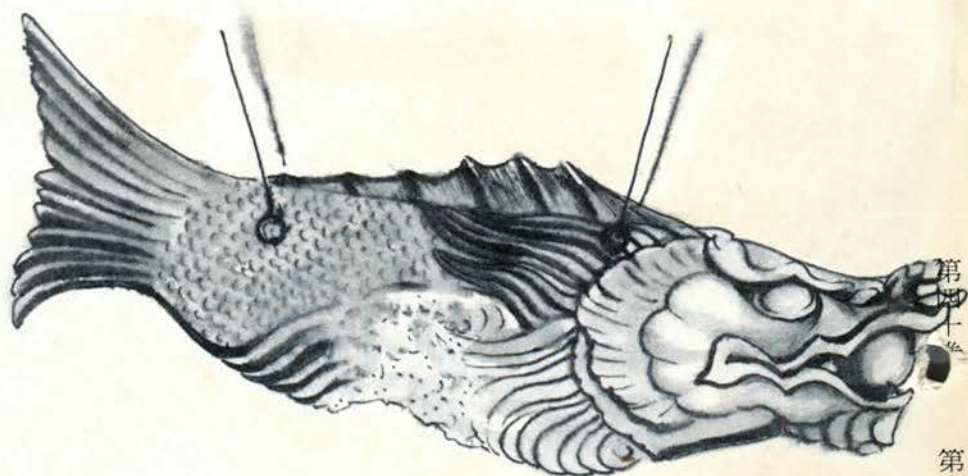


土 淨

昭和十年五月二日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投承認雜誌) 第三二五号
昭和四十九年十一月二十五日印刷 昭和四十九年十二月一日発行



第十二号

第十二号

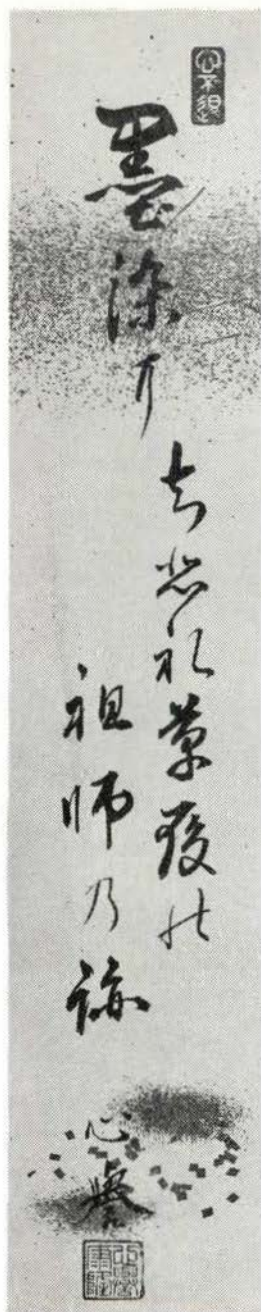
S. Kuz

1974
12

念仏行脚

墨染のちびれ草履の祖師の跡

大正大学教授 中村 康 隆



この四月、京都知恩院の開八法要には、執事長を先頭に全国から参集の上座がたによつて念仏大行進が京洛の街をぬつて連日行われ、また十一月十日には増上寺大殿の落慶を祝して帝都の大通りに、百十余名の青年僧侶の方々によつて、いまの世の眞の帰すべき道を示すかのように行われたのであつた。

それは何よりも墨染のちびれ草履の祖師、

法然上人の歩ませ給うた念仏一行の姿を、この上なく讃仰するものと呼ぶことができるであらう。これから是非毎年祖師の「御忌」奉修の機に帝都の大通りを行進して頂きたい。それこそ人類への無言の呼びかけといふことができるであらう。帝都に念仏行脚の行われることを切に願つたものの一人として、祖山での一句を記す次第である。



目

次

念 仏 行 脚	中 村 康 隆
法然上人と一遍上人	浅 山 円 祥…(2)
浄土開宗八百年を顧みて	
法然上人御開宗の意に還る	鶴 飼 隆 玄…(7)
一期一会の喜びにひたりて	吉 川 哲 雄…(11)
<成道会によせて> 釈尊成道の地に巡拝して	石 井 俊 瑞…(12)
特集 私の好きな「仏」のことば	
分陀利華について	金 子 貫 達…(17)
自帰依について	平 井 隆 一…(20)
『維摩経』から	長谷川 昌 光…(23)
法然上人霊場めぐり	村 上 博 了…(26)
第20番札所誓願寺・第21番札所勝林院・第22番札所知恩寺	
經典に聞くシリーズ 仏説無量寿経巻下<4>	村 瀬 秀 雄…(32)
念仏ひじり三国志⑧ 法然上人をめぐる人々	寺 内 大 吉…(37)
浄土宗の宝物 当麻寺奥院	後 藤 尚 孝…(48)

表紙 久住 静雄画

法然上人と一遍上人

浅山 円 祥

(時宗教学研究所長)



法然上人が真に出離の法を悟り得ず、苦悩されていた時、偶々善導の疏に「一心ニ専ラ念ジニ弥陀名号ニ行住坐臥不レ間ハ時節ノ久近ヲ、念々ニ不レ捨者ハ是レ正定業ナリ、順フニ彼ノ仏願ニ故ニ」の文を見て、これこそ自分のような機根の劣れる者のために、弥陀は法藏因位の昔既にかかる法を定めおかれたのかと感激され喜びに堪えられなかつたと伝えていきます。この時が承安五年（一一七五）で上人四十三歳、浄土宗ではこの年を以て開宗の年とし、本年が恰かも八百年に相当します。

一遍上人はそれより遅れること百年、文永十一年（一一

二七四）に熊野の社殿に於て、権現の夢想に、「御房のすすめによりて一切衆生はじめて往生すべきにあらず。阿弥陀仏の十劫正覺に一切衆生の往生は南無阿弥陀仏と決定するところ也」

と云われ、この時一遍上人は開悟されました。浄土教の法系からすると、法然―証空―聖達―一遍と系譜し、法然上人からすると法の上での曾孫に当ります。

開宗百年の差は自ら時代の変化を考慮せざるを得ません。即ち法然上人の活躍された頃は源平戦のさ中で、まさに有為転変、所謂無常がそのままにあてはまる「平家

物語」の世界であつて、古代律令国家が崩壊をはやめる決定的時点でありました。

一遍上人の時代は承久の変を経過し、鎌倉幕府の武家政権がようやく固つて参り、封建制度は徐々に進んで参り、念仏停止も大体一遍生誕の頃には終つておりました。

従つて一遍上人の時には法然上人の時のような末法観は見られません。源信僧都の云われる厭離穢土欣求淨土の考えもあります。むしろ真摯果敢な鎌倉武士的氣風が風靡してしまつて脆弱華美な王朝文化にとつて替つていました。自ら教義にもその変化が認められるのではないかと思われまふ。

法然上人の個々の法語を伺つておりますと端的にどこが一遍上人と違ふのかと思われる所があります。

聖光上人の末代念仏授手印に「源空の目には三心も南無阿弥陀仏、五念も南無阿弥陀仏、四修も南無阿弥陀仏なり」とあつたり、又一枚起請文に「但三心四修と申事の候は皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思(う)内に籠り候なり」と云われるあたりは意識をしななければ、全く一遍上人と同じである。

「ただ(念仏)申すばかりなり」と云われる時は全く一遍上人との相違は感じられません。

それではどういふところが相違するのか。

法然上人が叡山を去られたにはいろいろの問題があつたでしょうが、その中の重要な問題は叡山には一元論的本覚門という現実肯定的な仏教教学でありました。これからの脱皮の爲めに始覚門的二元論に立つためではなかつたかと思われまふ。

叡山には法華經の思想から娑婆即寂光土とか、源信僧都の淨土思想にも「己心の淨土・己心の弥陀」と云う如き内在論的な考えが行われていました。煩惱即菩提、生死即涅槃の如きチームは大乗仏教の極致として最高の哲学思想であります。本来これ等の思想は空思想を媒介として「即」と云われたものであるが、それを否定の否定としてでなく直ちに「そのまま」と無媒介的に解するような現実肯定をしたために、極端に頹廢的な思想に墮して行きました。

此れらを脱却する爲めに法然上人は二元論を指向された。

即ち娑婆に対して浄土を、衆生に対して仏、そして人から仏への回向行として南無阿弥陀仏を取りあげられたと云つてよいと思います。

この始覺門の二元の考は当時の人々には分り易かつたし、法然上人がただ凡夫のために立てられた浄土門にふさわしく多くの人々に理解されました。然しこの事は今日の人々には首肯し難い点が出て来たのではありますまいか。

浄土とは何か、阿弥陀仏とは如何なる仏か、念仏とは。

近世に於て了譽聖閻、西譽聖聡等の学僧により、又現代に於て、弁榮聖者の光明思想、椎尾博士の共生運動等によって新らしい解釈が行われた。

然しその根拠になる思想は本来法然上人自体の中に既にあつたとも云えます。上人の意識の底には「極楽は無為涅槃界なり」という仏教的自覚があつた。そしてそこに基礎を置いて人々に口称の念仏をすすめられました。

往生と云う場合、法然上人は有相莊嚴の浄土へ往き、蓮台に生まれると考へられているようであるが、本当の

考へは世親の往生論に云う如き浄土は「真実智慧無為法身」の世界と思われていたのではありますまいか。

指方立相即ち穢土を離れて十万億土の西方に浄土ありとする説は一遍上人は否定しています。

云く「菩提心論にいはく『過筏達彼岸ニ法已ニ応捨』と、極楽も指方立相の分は法已応捨の分なるべし」

「他力称名の行者は此身はしばらく穢土に有りといへども心はすでに往生を遂(げ)て浄土にあり」とか又

「生きながら死して静かに来迎を待つべし」

「万事にいうはず、一切を捨離して、孤独独一なるを死するといふなり」

ここで云う死は全く生理的な死でなく宗教的な死、換言すれば現実の超越を死と云つたのであります。一遍上人は又臨終即平生、平生即臨終といい、念々臨終、念々往生とも云っているが、然し浄土は己心の浄土と云つた内在的なものでなく、内在的超越としての浄土を云っていると云うべきであります。

客観な浄土はあり得ないことをこうも云っており、す。「能縁の心は虚妄なれば、所縁の浄土を亦もて実体

なし」そして「極樂は無我真実の土なれば、自力我執の善をもてまた、生ずべからず」、「空無我の淨土」であると云います。

此等の片言隻句は一遍上人の考えでありますが、恐らく法然上人の真底もここにあったのではないかと思われ

ます。

法然上人の選択本願念集に、
「衆生行を起して口つねに仏を称すれば、仏すなはち是を聞きたまふ。身つねに仏を礼敬すれば、仏すなはち是を見たまふ。心つねに仏を念すれば、仏すなはち是を知りたまふ。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまふ」云々

これは捨難撰正の五番対の得失の中の第一の親疎対の親縁を説く文句であります。法然上人は善導大師に従つて上人が仏を念する心が、人々を仏に繋ぎあはせる縁となる、ここで仏を念するとは名号を称える行であります。「只申せば生ると信じて念仏すべし」とは法然上人の教であります。

同じく第四の不回向回対には「正助二行を修する者

はたとへ別して、回向を用いずとも、自然に往生の業を成ず」といい、その理由として觀經疏を引き、

「今此ノ觀經ノ中ニ十声称仏ハ即チ有リテニ十願、十行、具足ス云イカ何ンガ具足スルヤ言フニ南無ト者ハ即チ歸命ナリ亦是レ發願、回向之義ナリ。言フニ阿彌陀仏ト者ハ是レ其ノ行ナリ以テノ三ノ義ヲ一故ニ必ズ得ニ往生ヲ」

これは法然上人が南無阿彌陀仏には回向の義があるのだから、衆生の行として特に回向を云々する必要はないと解された。その意味で不回向とされた。ただ上人の念仏は人に對す仏があり、仏に對する人があった。そして念仏は人と仏との交わりであつた。

聖光上人に至つては心に歸命（南無）なくして口に南無と唱うるだけでは往生の業ではないと選択伝弘決疑鈔に釈してありますが、これは常識的な考えであつてこれでは心、人と云うものが残つて來ます。

親鸞上人は人の側からは不回向であるとすれば、仏から人への廻向としか考えられぬとして、人には往生する力もなくただただ仏からの人への廻向行として、本願を信じさせて頂き、念仏させていただく云う仏の他力回

向を主張したが、ここには未だ回向される人が残っていると云わねばなりません。

証空上人は願行共に阿弥陀仏に具足していて人の力は一分と認められない。すべては仏が人に代って往生の業を成就して下っておると云います。従ってこの事を信解すべきであると云います。ここでも信解する人が依然として消え去ることにはなりません。

一遍上人に至って仏も人も消えたただ名号のみが残ります。「念仏が念仏する」念仏即往生といえます。

これは十劫の昔、法蔵が阿弥陀仏となつたのは衆生が称名したからである、人が往生し得たのも南無阿弥陀仏となえたからであります。南無阿弥陀仏こそ仏の正覺、衆生往の生の因であり、南無阿弥陀仏は眞実の法であり、仏と人とが存立する根拠であります。即ち「諸仏の己証」「衆生の本分」であると云っております。ここでは「阿弥陀仏は諸仏同道の仏」にすぎません。このあたりは法然上人と相違している所がありますが、又こうも云います。

「南無の二字は本願なり。阿弥陀仏の四字は本願に非ず。」（播州法語集）

これは西山義が仏体即行と云うに對して「南無」を強調したのでありまして、むしろ法然上人の始覺門の二元論の跡を残しています。

南無するのは仏にではなく、南無阿弥陀仏に南無するのであります。仏も人も共に南無阿弥陀仏の法に南無するのであります。

「此の法に遇ふ所をしばらく一念といふなり」と云っています。

「往生は初めの一念なり、初めの一念といふもお機に付きていふなり、南無阿弥陀仏はもとより往生なり」といい、別願私讃に、

「始めの一念かりほかに

最後の十念なければども

念をかさねて始めとし

念のつくるを終りとす」

いつもが初の一念であり、今の一念でありまして、ここに人が仏にでなく名号に、日時に仏が人にでなく名号に遇う切点を見出しました。法然上人によって見出された念仏は一遍上人によって行きつく所まで行つたと云えましょう。

浄土開宗八百年を顧みて



法然上人御開宗の意に還る

鶴飼隆玄

(総本山知恩院執事長)

浄土開宗八百年記念の慶讃法要と行事並に数多くの記念事業が全国門葉の物心両面に渉る支持御協力とによって円成する事が出来ました事は、元祖大師法然上人の御遺徳の賜であると共に念仏教団の必要性を認める時代人心の支えによるものと感謝にたえません。

顧りみて開宗八百年が開八の略称で親しまれ十年前から全宗門挙げて準備体勢に入り、広報活動に併せて念仏行の実践

的一体化によって進められた悲願稔りの成果であるとは云え、開八慶讃会が開八慶讃報恩行の頂点であってならない事は誰しも認識する処でこのムードを更に盛りあげ八百一年を如何に歩み如何に念仏行に徹するかと云う点が今私達に課せられた重大責務であります。

浄土宗が信徒の信仰的躍進を期する為には、先づ教団の近代的感覚に基く脱皮を實現して時代の要請に答え、人間性の

再開発により世界平和と人類の福祉に貢献し得る人々の養成に協力出来る教団と成らねば、祖師御開宗の御真意に酬ゆる事は出来ないのではないかと信ずるのであります。

ややもすると記念云業を行うことや、法要する事のみがあたかも開八慶讃の目的であるが如く考えられ易いのであります。

然し記念慶讃の諸行事と事業はすべて八百一年以後の歩みの出発点でなければなりません。

随って記念事業は又今後の歩みに対処しうる計画の下に行われたものと考えるのであります。

浄土一宗の総本山として宗門教化の中核的使命を有する知恩院に於て実施された記念事業は次の三点に収約されると考えるのであります。

第一、青少年の教化の指導的拠点

この為上人が若き日二十五年に渉る欠乏に堪えて一意精進を続けられた聖地黒谷青竜寺に天台宗延暦寺の理解を得ての青少年訓練道場の建設。

第二、行動的教化実践道場和順会館の建設

祖廟下に莫大な浄財を投じて会館を建設した事は單なる宿泊施設ではなく、行動的教化の実践である「おてつき運動」の推進の為、全宗信徒の結集と修鍊を兼ね行いうる拠点作り

であつたのである。

第三、源光院の再建

第一、第二の目的を実現する為には旧來の如く限られた地域の人材による祖山奉仕から全国的スケールの下に指導者奉仕者の結集を図らねばならないのでその私生活面充足の一部としての宿舍の建設である。

その他権現堂、宝物展示場、収蔵庫、友染苑を初め雑多の事業はすべて第一、第二の実動に必要な近代性を加えた。

指導指針の調整と実施の補助施設

行動性の裏付実施及び半径拡充の施設である事を含めて考えて頂ければ、そこに一貫した明日以後に於ける行動的教化意図が判明し、悲願躍進の心が理解出来ると信じます。

然らば明日の躍進は何を目標に如何にして実践すべきかと云う点であります。

これについて既に述べた如く行動性の裏付けある教化とは何かと云えば或いは独断、独善のそしりを招く怖れはあると思ひますが、

(1) 伝統的な教化策が形式化し、観念的になつて現代人の心に適合しなくなつて来た。

(2) 随つて明日の教化は現代人に信仰心を誘発し得る行動的信仰を肌を通して感ぜしめるものとしなければならない。

私達凡夫は何事につけても時間の経過に伴って形式化しまゝにして感激性を失ひ勝ちであります、行動的教化と信仰は何百年の歴史を通して八十八ヶ所巡り、三十三ヶ所巡礼に明らかな如く生き続けて行くのであります。

本宗に於ける五重相伝が道場制規が厳しく実施されればされる程強く永く印象され、日課による念仏に実践の法味が体得される事実を忘れてなりません。

元祖大師御遺訓一枚起請文の初めに

「もろこし我朝に諸々の智者達の沙汰し申さる、觀念の念にも非ず、又學問をして念の心をさとりて申す念仏にも非ず、唯往生極楽の爲には南無阿彌陀仏と申して疑いなく往生するぞと思ひとりと申す他には別の子細候はず」

とおさとし頂いているにも係らず現在私達の他力法門の教化方策又は念仏生活の実感に誤りなしと断言出来るかと云う反省から出発しなければならぬと思ひます。

現代日本に於ける最大の関心事は「失われた人間性」とそれに起因する各種の社会現象と混乱の収束ではないかと考えます。

この依つて来る因は近世百年の教育と仏教教化不振ではなかつたと云えるでしょう。

近時人々は無信仰、無宗教が有識者の誇りであるが如き誤りを犯しています。

然し一般的には生活即応の信仰を求めてやまない事は否定出来ないであります。

過去に於て社会的混乱の時代には新興宗教が多数輩出し、その中適者生存の方則に随ひ、二三のものが残存し力強く時代人心を支配する影響力をもった事は明らかであります。

戦後も又この一例に過ぎないのであります。七五三のお参り風景から考えても潜在的には信仰なくして人心の安定と幸せが得られない認識は誰しも保持しているのであります。

この潜在感覚を顕現する爲には必ず生活感覚に即応出来るものでなければならぬ事も新興宗教の実体が証明しております。

然るに伝統千数百年の間に本人の依憑であつた仏教信仰が何故現代人の心から失われて来たかと考える時「時代感覚を吸収せざる伝統的形式主義が人心に力強く響かなくなつた爲である」と結論されるでしょう。この反省に立つて他力浄土門の念仏実践の導きを考えねばなりません。

この意味に於て「おてつぎ運動」を総本山が九年前から提唱実践して来た意図が理解して頂けると信じますと共に、単に法要儀式中心の変動的教化を脱皮し、行動性ある能動的教

化即ち生活感覚を活かす信者造りを段階的導きによって実施する必要を感ずるのであります。

おてつき運動の第一次目標は他力に生かされる喜びを知り他力報恩の心構えを導き人間性の再開発に役立つ生活行事体験であります。

第二次段階に於て仏教の基礎的生活理念のめざめを導き、他力縁起による一体感の自覚を促かし他力念仏往生の信仰の芽生えに結ぶ為に感情的芸術（音楽・絵画等）を介して体験



一期一会の喜びにひたりて

吉川 哲雄

（大本山光明寺執事長）

的信仰を能動的に推進せしめる事にあるのです。この段階的教化は時代文化と生活感情を含めた体験的指導と自主的推進を図らねばならないと考えます。

当に開宗八百一年を迎えんとするに当って激動する人心の帰向を考慮し、元祖大師御開宗時を偲びその素意に還る決意の下に革新的教化を実現する為に「おてつき運動」の目標を強く行動的に実践する事こそ祖師報恩の道であると信ずるのであります。

歳たけてまた越ゆべしと思いきや

命なりけり小夜の中山

これは歌僧西行が晩年東海道を下って小夜の中山峠を通った時の歌であると聞いております。これはかつて若き頃この

処を過ぎたことがあるが、この歳老いた今再び此処を通ろうとは……命永らえたればこそ、有難いことであるとの意味であらう。

我々は今春浄土開宗八百年の聖歳を迎えて今この歳を送る

うとしております。浄土一宗としても昭和四十年にその準備委員会が組織され、又各総大本山に於てもそれぞれこの歳に向つてひたすら準備を整えて参りました。三祖のご遺蹟である鎌倉光明寺もそのための歩みを進めて今日に至りました。

先づ第一の念願は雨漏りの甚しい老朽の大殿、開山堂、三門等を大改修し念仏道場として整備することになりました。然しこれには莫大な費用を必要とし無檀無縁の地方本山として果して可能であるが否か大きな疑問でありました。然しこの悲願は何としても達成しなければなりません。老齢の前法主大野大僧正、現法主石井大僧正を陣頭に全山火の玉となつて精進努力を続けて参りました。その結果仏天の冥護と十方有縁のお力、特に神奈川教区二百五十余寺のご住職、檀信徒を始めとして全国の寺院、特信者のご協力により今年五月にはその計画のすべてを完了し、三日間に亘る開宗八百年記念慶讃法要を厳修させて頂きました。これによつていささかなりとも祖恩に奉答させて頂くことが出来たとしたならば、これに過ぎた喜びはありません。

今鎌倉材木座の潮騒を耳にしながら新装なつた三門の覺越しに三祖記主禪師の眠られる天照山の翠を仰ぐ時、この歳、この処にめぐり会えた感激で胸迫る思いがいたします。と同時に脳裡にひらめいて参りますものは宗祖上人の「念仏の声

する処我が遺蹟なり。」とのお言葉であります。立派に堂塔の落成は見たものの此処からお念仏の声が聞えなかったとするならば、誠に申し訳ない次第であります。この諸堂の大改修もこれは念仏弘通のための手段であつて真の開八を記念するための行事は今を出发点として前進しなければならぬことであります。堂塔伽藍の改修、境内の整備、大法要の厳修等勿論これも大切なことでありますが、これをもつて足れりとするならば宗祖の立教開宗のご精神に背くものでありましょう。今後我々の責務は極めて重大なものがあります。お蔭をもちまして整備された三門をくぐつて下さる方々が日に日に多くなりました。又大殿や開山堂の中からお念仏の声が響く日々が続くようになりました。今この佳き歳を送り開宗八百一年を迎えようとする時、身内の引きしまる思いがいたします。最後に今夏大殿に参籠され毎日五万遍の念仏を修し遂に百万遍念仏を成満されたある特信者が法悦の喜びを詩に托して寄せられました。今ここに記します。

お念仏の中に

お念仏の中に すっぱりかくれてしまった。

私はどこへ行つたのだらうか？ ただお念仏の声だけが

どこからか 静かに聞えてくる。

限らない喜びと一緒に。



成道会によせて

釈尊成道の地に巡拝して

石井俊瑞

(東京小石川真珠院住職)

(一)

十二月八日は仏祖釈迦牟尼世尊成道の聖日である。わたくしは、ちょうど丸一年前仏教発祥の地インド、しかもブッダガヤで勸修された日本寺落慶法要に老齢の身にかかわらず参加させていただき、真に有難く感激した次第でした。そうして、その法要の前後の日数を他の仏跡巡拝に掛けたわけである。仏跡の場所々々で同行の方々が集って話を聞いておいでになつてゐる間、わたくしは難聴の故を以て離れて、こうして現地に直接きた喜びを、今日まで学び習得した多少の知識を思い浮べながら一々メモした次第であつた。それを纏めたのが先般出版した「仏徒、インドに憶う」の小冊子である。ところで、今再び成道の日を迎えるにあたり、更にメモの他の部分を記することにする。

尼連禪河の此方から釈尊入山の前正覚山を望んだ時、釈尊はあそこで勤苦六年(御年二十九歳から三十五歳まで)なさつたとお経にあるが、(一)一体どういう思索経過をおたどりあそばされたのであろうか。(二)また釈尊はその生の心身をどういう風にお保ちあそばされたであらうか——これは誠に無礼千万で、常平生尊崇し奉り、不断に恭敬礼拝しておる仏祖を形而下に引き下ろし「人間釈迦」として考えるなんて。その(三)は釈尊がご思惟なされ、お覺りになつた、そもその人間は一体どんな内容をもつた者とお考え下されたのであろうか。こんなことは解りきつたことではあるが、わたくしには昭和二十年直後と思うが大正大学の特殊講義で「臨床診断心理学」という題目で、先づ前件として重視すべき人間学(Anthropology)の問題を講じたことが再び浮んできたの

であった。

(II)

釈尊はすべての財と位とを捨てて人生の帰趨を究めようと、ご出家なされ、当時知名の学者とかバラモン僧とか隣通の仙人などをご歴訪なされた。当時インド一般で行れていたところの坐禅をして心を統一し思惟をこらし瞑想するという禪定にお入りなされたところ。しかしながら一向に満足な解脱の悟りを得られなかった。そこで今度は、これもインド在来の慣例に基いて生身を痛めるといふ苦行によって悟道を開こうと人里離れた山にお入りになったわけである。なにしろ当時インド殊にマカダ国には九十二種類もの沙門(Samana 反バラモン修業者)が集っていたようで、長阿含梵網經によると、これ等沙門の思想は過去に関するものだけでも十八意見の分れがあり、未来に関する説についても四十四見程もあってそれぞれ独自性をそなえていたようである。

中でも有力なのが、いわゆる六師外道で、その一々の特徴については長阿含沙門果經に伝えておる(宇井伯寿師、印度哲学研究第二、第三卷等にある)。しかし、いづれも抽象の代りに具象が、また想像より経験が思惟の根柢となっていたようだ。わたくし思うに、恐らく釈尊は苦行を続られけながら、ご脳中でいろいろと従来からあったバラモン教の教旨や

ら、沙門達の雑多な思想を浮べ、いろいろと試行錯誤的思索過程をおたどりあそばされたのではないだろうか。

しかしこれもこれには解脱の本筋ではないとお考えになり、出山の釈迦として山をお下りになり栄養分をお摂りになり、河水に沐浴なされて、そうして体力と氣力をご回復なされ、心身を清潔爽快にして、今の大塔下にある菩提樹下で再び結跏趺坐、禪定に入られ成正覺されたわけである。この釈尊のご入定は(一)離生喜樂(二)定生喜樂(三)離喜妙樂四捨念清淨の四禪を具えたもので、死後のことではなくて、現世において煩惱を克服し人格を完成するものであった。釈尊はご成道後もよく禪定にお入りになったようで、そのご入定後表わされるご瑞相に端を発して多くのご説法(これがお経)があったわけである。

(III)

ところで勤苦六年、一口で言えるが、さてこの長い間それも苦行しながら、どうしてお体を保持なされたであろうか。あの横井さんや小野田さんのこともあるが、恐縮ながら釈尊の場合は、なんといっても、生への執着を離れてむしろ身を痛めて、そもそも人の帰趨するところの法を会得せんとご修行なされたのである。あちこちでご修行中の、また出山の仏陀の絵像を見たが、あの骨だらけの瘦身のお姿——(もちろ

ん想像であろう)——真にご苦行の程がうかがわれる。

わたくしは專攻学の關係上、つい精神身体的考え方 (Psychosomatic aspect) を加えたくなりました。特に腦生理のことが浮んだわけである。フランスの精神科医であるイヴ・ペリシエ (Yves Pelcier) がその著「精神医学の歴史」で古代インドの医学について述べておるが、元来インドの医学思想は誠に優れた医学概念と、考え方に富んだ生理学的な思弁を併存させておったようである。もちろん釈尊は大經にあるとおり、元來が勝れた方で、王子であられた時代にも「文芸射御忼綜道術貫練群籍」で十二分にこれ等インドの独創的なものの一つであるといわれる心身相関の原理についてご会得あそばされていたものと拝察する。

ところで、それよりもまづ釈尊ご自身の頭腦組織はどんなであつたか。一応わたくしをして思わしむれば、とにかく極めて勝れた腦の組織構造をもつておいでになつていたと察し奉る。特に知に關連する(イ)腦神經細胞の数(これは一五〇億以上あつて出生時にその殆んどが備つておつて、生後もし損傷するようなことがあれば筋肉細胞のように補充ができないし、またその多少は個人差がある、更に老年期になると委縮し勝ちである)が、とても多くあられたであろうと拝するし、(ロ)また腦神經細胞同志のからみ合い(これは神經原の樹

枝状突起が生長に伴つて結び合うことを指すので、これは遺伝にも因るし、刺戟の多少によつても違ふ)も非常に好調であられたであろう。(ハ)更に大脳皮質における分業体制が極めて超人的であられたことなどが基となつて智的働きに重要な關係をもつ、高等な心の営まれる連合野の広さが非常に優れておいでになつたであろう。従つて前頭葉と側頭葉のご発達には特に著しかったのではなからうか。これは我が宗祖法然上人のお像を拝して、いつも感ずるところである。尚また釈尊は入涅槃まで尊いご説法をお続けあそばされたのも腦の機能としての髓液(これは脈絡叢からどンドン分泌して各中枢を流れる透明な水液)が常に活潑に流れ、よく腦細胞の疲労物質を洗除していたのであらう等と、その教法という高い見地からは、誠にくだらぬことのようにはあるが末世のわたくし達にとつては矢張釈尊が身をもつて衆生にお示めくださった無言のお諭しとうけとめたい。最近腦軟化症とか老若性痴呆の方を聞くが最近の研究報によると、こういう患者の髓液の流れは停滞ぎみであるという。また人は、よく老人達にその健康法を尋ねるがこれに対し多くの老人は体の健康法を答えておられる。テレビの「頭の体操」番組ではないが、体の強壯法と共に腦を働かすことを心掛けねばならぬ。これは正しく釈尊を通じて、つくづく思い知らされたことである。

それから釈尊は、よく禪定に入られたが、あの結跏趺坐の坐禅は、調身、調息、調心ということが大切で、この静慮法の修行によって生理的に人は識らず識らずの間に下腹丹田の力ができ体全体が強健になるのである。それだけ酸素といろいろな栄養素が必要になってくる筈であるが、さて釈尊は戒律厳修の上であつたから何を摂つておいでになつたのであらうか。更に仏智の坐である脳を支える物質代謝を考えると、元來脳を流れる血液量は一分間約七五〇ccで全身の血流量の二〇%にあたるといわれ、酸素消費量も從つて多い。また脳は類脂肪体(リポイド)を沢山含んでおつて、そのための食物摂取も肝要であらうし、尚脳のいわゆる機能代謝としては蛋白質、ビタミン等いろいろの栄養素をもつた食料を摂ることが必要だが、釈尊は智徳勝れた、いわゆる般若者であられたのであるから、——(大正新修大藏經の所々釈尊の医薬のお知識のことがある)——適宜ご摂食あそばされたのであらう。

(四)

釈尊は王宮内におけるご生活ご安樂を、外では生苦、老、病、死という苦の場面をご経験になつて、この兩極端をお心深く感銘せられ、人の生活を包んでいる物心の諸要素は總べて苦の種であるという世界觀、人生觀からそもそも人間の真

の在り方如何というようなことをご思念なされたものと推察し奉る。それがご出家の近因であらう。そこに、またご出家後お会いなされたバラモン僧や沙門達のご思想とは食い違つた根本があつたのではなかつたか。故に釈尊の思惟されていた解脱(Vimutti)はますます眞の人間になること(Becoming or Werden)であり、而もそれは人ならざるものを棄てて益々人間になつてゆく、否、なつてゆくことができるという意味で、苦を恐れ病死を忌避し(Erlösung)また人間を脱し(Release)しようとするのとは全く違つていたのである。

わたくしは大正九年末頃から司法省から受刑者(當時は囚人と呼んでいた)の個性診査を委嘱され、爾來二十四年間從事してしたが、そもそも人間とは如何ということが常に頭の中を往来し外国の本も多少読み、想を重ねていた(これが大學での講義の一端となつた)ものである。一体、人間の見方は現実的な生ける個人そのものから出發して、そして人間の實踐的な活動、更に実践的發展過程において把えて理解してゆくことが必要ではないだらうか。そこで、先づわたくしは、一人人間なるものの特性はどんなものかを考えてみた。

マクス・セラー(Max Scheler)はその著「人間と歴史」で西洋文化の中で人間の本质を論じている、思想傾向として(一)キリスト教的人間學(之は人間を神との間において理

解しようとするもの) (一) 思维的人間学 (之は人間の本質を理性とするもの) (二) 自然的人間学 (之は人を特殊な動物と見るもの) (四) 生命無力的人間学 (生命からの外避者と見るもの) (五) 超人的人間学 (之はニイチエ (Nietzsche) の超人の考え方をを用いた説) の五を挙げておる。然し大まかに分ければ (一) 身体に関する科学 (二) 意識に関する科学 (三) 文化の科学 という三つ位にちぢめられ、それぞれの立場で人間を研究し論ずる。

いづれにしても (一) 人間は生命をもって具体的に活動しておる一つの生活体であつて、唯單に呼吸し消化し血液を循環させ排泄するような身体的生活体だけではないし、また見たり聞いたり喜んだり慾を出したり考えたりするだけの精神的な生活体でもない。更にまた道德的、宗教的、芸術的或は経済的生活を営むところの文化的生活体でもない。尚かういう上のものを寄せ集めた複合的な生活体でもない。むしろ之等の區別以前のものであつて、しかも心身及び文化活動にそれぞれの意義を、否それ等をして身体的精神的また文化的たらしめる特質を与えるところの全人的、統一的活動体である。 (二) 尚上のように人は内面的に統一する全一として周囲の社会に対し独立し、また他の人々と相互に異つた特殊な実在性、すなわち個性をもつておる。従つてそれ自体をもつて代替することのできない固有の価値をもつておる。 (三) 而も自律と自由

とをもつ自主体でもある。それだからキリスト教神学者のいうような至高な神のみの独立性を認めて人には許さないようなものではない。四また人の具体的な現実的な生活は、決して盲目的活動ではないので、高低の差こそあれ、そこには完全なものに発展しようとする目的、追求の生活努力をしておる。ところで人はその周囲との関連において種々雑多な行動表現をするものだ。釈尊のご説法の多様なものは、こうした人間の多様な生活相に順じてなされたためであると考ええる。

(五)

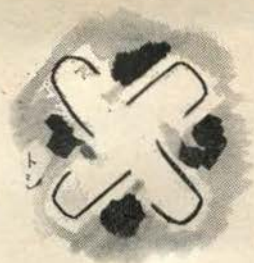
とにかく釈尊は、上のような現実的人間を対象として、存在するものは総べて生滅変化するものであり (諸行無常) また、そこには絶対不変の本体というような存在はない (諸法無我) という真理を出発点として縁起の理を觀じ、遂に悟りをお開きになったことは周知のとおりである。人間的存在を構成している物心の諸要素は何れも苦の因であるから、ここに四諦の理を説かれ八聖道をお説きになったのである。故に、これはむしろ釈尊が思惟なされた中心ではなくて解脱を可能ならしめるための認識論であり方法論であつたのだとわたくしは思う。わたくしも漸くこの老年になつて今更のような「百聞(説)一見に加かず」の諺と師僧から承けた「読書百遍、意自づから通ずる」を玩味した次第であつた。(合掌)

特集 私のすきな仏のことば

分陀利華について

金子貫達

(浄土宗長崎教区長
長崎市銀座町聖徳寺住職)



浄土宗の依りどころの經典は浄土三部經であります、この中の第二部に当るのが、仏說觀無量壽經で、この經典の最後近くの部分に

“若し念仏せむ者はまさに知るべし、この人は是れ、人中の分陀利華なり”

と仏さまは阿難尊者に告げておられます。このお言葉の意味

は、自ら知らずして罪を作り、心の至らざるよりして罪を作り、或は怒り、或は悲しみ、或は思い患うて“苦より苦に入り、冥より冥に入る”凡夫の私等が自己を觀省する場合に、お念仏によつて救われゆく具象的なすばらしい引例のお導きの言葉であると思われまふ。

分陀利華とは白蓮華の梵語であります。ハスの花は日本に

は淡紅、紅、白が普通ですが、稀に黄色の咲く花（北アメリカ産とも言われ、大正年間に日本に入った）もあります。印度が原産といわれています。

印度古代民話では、蓮華は女性の生殖を象徴し、多産、力、生命の創造を現わし、創造力、神聖、不死等のシンボルともなっていたといわれます。

仏教時代になって、ハスは仏陀の生誕を告げて花を開いたといわれ、仏教徒の極楽では、総ての者がハスの花の上に神として生れると信ぜられていました。インドでは種々の神にハスが捧げられ、神がハスの台座に座ったりハスを手にしていたので、古来より仏教でも仏陀の像や高僧の像をハスの台座に座させる風習があったといわれます。

日本に於て、仏菩薩高僧が蓮台上にあらせらるるのは当然の姿と定着しており、本堂の須弥壇、前机に蓮華は欠かされない莊嚴の一つで、又日常用うる香典、供物の袋類にも必ず蓮華が印刷されていますことは周知の通りであります。

文学の方でも古くは古今集に

はちす葉の濁りにしまぬ心もて

何かは露を玉とあさむく

と遍照の歌が載っており、又枕草子には

妙法蓮華のたといにも、花は仏に奉り、実は数珠につら

ぬき、念仏して往生極楽の縁とすればよ”

と清小納言は書き記していますことは古くより日本人の心に蓮華が仏華として定着していたと見られます。

日本仏教の前身地中国に於ては西方浄土即ち極楽世界は神聖な蓮華の池だとも信ぜられていました。

印度、中国、日本を通じて、共に蓮華が仏教と切っても切られない信仰的な媒体物となっていた事が知られます。

蓮華は何が故に仏教の聖華となったか更めて考えて見たいと思います。

申す迄もなく蓮華は泥中の蓮根によって咲かされます。蓮根は深いどろどろの汚らしいどろ田にこそ生長します。

美しい花が咲くからといって庭先の土中にその蓮根を埋めたとしたならば生長するどころか腐ってしまいます。蓮根は汚らしいどろ田を良きより所として、どろ田の精分を吸収して生長し、花茎は泥土中の蓮根から直立に水上に高く出で、花茎の頂きに泥に染まぬ奇麗な芳香ある花を咲かせ、又葉茎も直立に伸びた頂きに四〇センチから七〇センチもの、緑の葉を拡げて共に汚らしい泥田を飾り、見る者をして喜ばしめる存在となります。

花の色は先に言うように色々あるとしても、その中の白蓮

華即ちフンダリ華が清楚で気高く見えるのでインドでは蓮華の中の蓮華と賞美されています。

今仏教の眼より見れば、蓮池の泥田は何を意味しているのでしょうか。それは人間の憂悲苦悩の汚れた人生、五濁惡世の世相とみなされます。人々は泥田に比す人生苦悩の中に生活する宿命があるのです。この宿命を遁れては人生生活はあり得ません。

ただ、本当に生きるために残された道は、恰も蓮根が泥田の中にいて泥田を精分として吸収するが如く、そしてその精分によって生長する如くに、人間を蓮根に譬えて、憂悲苦悩の泥田を反つて恩寵の資料と転換して受取り、五濁惡世の泥水も私を新生命躍進の活素と受容することが出来るとしたならば、白蓮華のような美しい人格の花が咲き、百万人と雖も我行かんの勇往邁進のフアイトも湧然と起ること必然であります。この受取り方の変化、転換がいわゆる浄土往生であって、人間、社会苦に即して、ひたむきな念仏とその相続によってのみ成し遂げらるるのであります。

人間苦往生苦に即するところを觀經の「若し」に受取り「正に知るべし」は万一にも間違ひありませんよと受取るところに念仏がいきいきと力づき「人中の分陀利華」の文が念

「仏名会」のころ

師走十二月を迎え、私達の心も歳末のあわただしさに何となくせわしない気分に迫られるものです。この時節、「仏名会」というゆかしい年中行事のあることは、今日では一般の人々に余り知られていません。

この「仏名会」とは、一年間の自己を振り返って静かに反省することを目的としています。つまり、その年におかしたであろう罪や垢を心から懺悔し、ひたすらに過ちを悔いる法会です。もとより古来から宮中の年末行事として有名でしたが、各宗寺院の本山などでも伝統的に広く行なわれ、お正月の吉祥悔遇と対して大変意義深い法会であったと思われます。

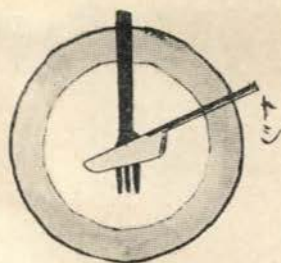
浄土教を信ずる私達は、「南無阿彌陀仏」と称名して、忙しい師走の一日に、ふと自己自身のありようを確かめ反省するのも意味のあることではないかと思ひます。

頼もしき未来なりけり御仏名

松瀬青々

仏救済の自証となってきました。人生の生き行く教訓、サンブルとして分陀利華が仏の言葉となり、仏教のシンボルの花

と成ったものと思われます。



自帰依について

平井隆一

(東京都文京区在住)

お釈迦さまが長老弟子の問いに答えられる。問いは、ある弟子が自らは知らぬうちに悪を行なってしまった。そんな場合、その弟子は許されるか、というのだ。問いの心のうちとしては、その弟子の行為は悪を行なう意志があつてのことではなく、知らぬうちに行なってしまったのだから、不可効力

ない。「スツタニバータ」であつたかもしれないが、今はつきりとは指摘できない。しかしわたくしには妙にこの説法が心に残つて、その梗概は今も記憶しているのである。

のようなもので、許されてよいのではないか、というような意がある。ところがお釈迦さまはこの意に反して、それは自ら悪を意識しつつ行う者よりも、ずっといけないことだと教誡するのである。この説法がどこにあつたかは、今は記憶に

実にはわたくしも問者の意と同じように思つて、なぜお釈迦さまが、それと気づかず悪をしてしまった者を厳しくさとしたのか、合点がいかなかったからである。現代の裁判でも、その冒頭に検事の起訴事実に対する容疑者の罪状認否と、認めた場合にはその意志、かんを問う。意志の有無はその後の裁判経過に重大な相違を生ずるようで、もちろん意志があつ

たか、という方に力点があるわけで、なければ問題は少なからず減ずるにちがいないのである。もっとも近年は未必の故意とか、いろいろあつて複雑になるばかりであるが、先のお釈迦さまの教誡は、こういう法律上の裁判とちがひ、人間の真実のあり方に対する判断であるから必らずしもびつたりとはあてはまらないであらうが、お釈迦さまの説法はこの近代にも厳しく適用し得ることが少なくないので、見すごすことができないのである。常識的にみて、わたくしはそんなつもりはなかった、というのは罪一等を減ぜられる相当の理由になる。時にはこれを理由にさまざま小悪を逃れることも少なくないかもしれない。その行為をこうむつた方も、そういうられるとそれ以上追及できず、なんとなくおさめてしまう。

ではなぜお釈迦さまは意識せず悪を行なう者を、意識しつゝ行なう者より、より許せないとしたのか。わたくしがこの説法を知つたのは、ちょうど青年期に入つたころである。そして今、好むと好まざるとにかかわらず年令的にいへば人生の次の時期に入りつつあるといわねばならない。そして少なからず恥を積み、ハツたと気づいた。お釈迦さまの意図には深いものがあると思われるが、世間的にいへば、要するに、知らず知らず悪をおかす者は、悪を意識しつゝ行なつてしま

う者よりたちがわるいのだ。その場合、悪はもはや大や小や内容をとわない。

わたくしたちは誰も一人のみでは生きてはいない。否、生きていこうとしても、いけないのだ。必ず何びとかとふれあい、身口意の何らかの行為がおこなわれる。そしてそれぞれの局面にあつて、時に傷つけられ、また自ら知らず知らずのうちに相手を傷つけているかもしれないのだ。中世のある高僧は「我等懺悔す。無始よりこのかた妄想に纏われて衆罪を造る」といい、「行住坐臥知ると知らざると犯す所の是の如くの無量の罪」を三宝にことごとく発露し、「慈悲哀愍して消除せしめたまえ。皆悉く発露し盡く懺悔したてまつる」と悲痛な叫びをあげている。まさにわたくしたちの行為は「知ると知らざる」とである。忿怒、憎悪、驕慢、邪智、嫌悪、貪欲、粗暴、汚濁、耽溺、強情、怠惰、嫉妬、執着、盲従その他もろもろの悪念を知ると知らざるとおかしめて、煩惱の汚れにまみれているのが、人間の社会のようである。わたくしの未熟からそのことに気づかなかつたゆえに、お釈迦さまの説法に疑念をさしはさむ。考えてみれば無知ということはおそろしいことである。そして今、少なくとも自己の未熟さに気づいている。わたくしの師事するある先生は、勉強すればするほどわからないことがでてくるものだ、と口ぐせのよう

に申されている。まさにその通りである。悪を意識しつつ行なってしまう者、それは行なわざるをえない状況にあるのかもしれない。悪を意識するということは、よきことを思念することに通ずるかもしれない。悪意は悪意をとりのぞけば当面の解決がつく。

ところが悪を意識しない者には、その者の行為が悪たることをまず意識させねばならない。ところがこれが難事である。ひとがどのように言おうが、結局は自分で気づいてもらわなければならないのだが、わたくしの経験からいって自己を客観化しその奥にわだかまる妄想を直視するということは、大変に苦しいことである。苦しくともこれをしなくては自分で気づくことはできない。しかし応々にして、他人に厳しく自己に甘く、ということになってしまふようである。

戦後のわが国はさまざまな意味において激動の時代をむかえたといわれる。そして今、わたくしたちのまわりをみると、「日本人論」の流行をみるのであるが、それは確かに総体として日本人が日本人自らを問うことになるが、しかしながら個々の日本人が個々の自己をみるということは、どうなっているであろうか。自己を棚にあげてしまつて「日本人」を見つめて、創造的な何かがうまれてくるであろうか。この自己をみつめるということこそ、仏教の発見的、

今はやりの言葉でいえば「原点」ということができよう。ここから、後には唯識などというきわめて精密な心意識説を生みだすこともなるわけであるが、それはともかくとして、仏教がこの自己をみつめることに大変に勢力をついやしているということに、仏教全体の性格を決定しているといえようである。お釈迦さまの入滅直前の説法が「自帰依、法帰依」ということは有名であるが、その場合の「自」は、このようにして厳しく問いなおされた「自」でなくては、怠惰・放縱にながれるばかりであろう。

わが国の仏教には周知のごとくいくつかの宗派が存しているが、それらの各宗祖とも、この自己をみつめた成果を、それぞれ「宗」として力強くうちだしている。このようにみる限りにおいてならば、どの「宗」がよくなり、とかいふ議論は出ないはずである。わたくしたちは、どの門からも仏教の法域にせまることができ。この宗を問うことができるのは、明晰な仏の智慧と、永い歴史の重みのみではなからうか。

未熟である自己に気づいたとき、その発見によるこんでしまつて未熟そのものに安住してしまふ、いわゆる居直りは、もとより厳につつまねばなるまい。そしてこれからも知る

と知らざるとひとを傷つけるかもしれない、また時には傷つけられることもなきにしもあらずである。これが人生である、などといった、きつた顔をするのもよくない。自己を厳しくみつめ、あるいはみつめる目をやしなう、そして不断に努力を

おこたらない、これを力強く訓誡しているが、先のお釈迦さまの説法ではなかったか。そのようにみつめ、みつめつくしたとき、はじめて広く深く人間存在の根底にせまることができそうである。



『維摩經』から

長谷川昌光

(横浜市戸塚区光安寺住職)

善ク来^{タマヘリ}文殊師利^{ニシテ}不来ノ相^{ニシテ}而^{シテ}来^リ。不見ノ相^{ニシテ}而^{シテ}見^{ラル}。(大正一四・五四四b)

「よく来られました。文殊師利よ。来られないままにやって来られましたね。お会いしないままにお会いしますね」
(意訳)

大きな仏教の典籍の中でも、『維摩經』は民間においても比較的よく知られている經典の一つであろう。普通、大乘仏教の初期(一、二世紀頃)に成立した經典といわれ、『般若經』の空思想を踏まえた内容で、いわゆる維摩居士が活躍する物語である。有名な「維摩の一點響雷の如し」と喩えられた「維摩の默」とは、この經典のクライマックスの言葉であ

り、これもまた古来より人々のよく知るところであらう。

經典とは一般に釈尊仏陀の説法をまとめたものと解されるが、この『維摩經』は維摩結（ヴィマーラキールティ）という在家居士を主人公に展開し、その維摩居士の深い仏教思想を余すところなく披瀝して全篇を形成している。そして維摩居士は、釈尊当時の自由商業都市ヴァイシャーリーの富裕な長者で、妻子とともに穏やかな生活をする一市民として設定されている。しかも物語は、この修行者でもなんでもない維摩居士が、傑出した出家比丘や諸菩薩を相手にその卓越した機知と深遠な思索とを縦横に駆使してあたかもやりこめるがごとく、まったく有名な比丘連は引き立て役でもあるかのようにしか登場しない。こうした特色はおのずと『維摩經』の内容の特異性を示している。もとより物語性に富んだドラマティックな内容もさることながら、今日まで人々にあまねく広く読まれて来た仏典であってみれば、そこには必然的に深い仏教の教えとその実践の指標が記されているのである。今は、その内容をかながみながら冒頭の言葉をめぐって『維摩經』の一端を覗きみよう。

さて『維摩經』第一章（漢訳「仏国品第一」）は、釈尊仏陀への称讃を語る帰敬の序章であるが、ここでは空思想にもとずいた『維摩經』の世界観が象徴的に表明されている。すな

わちその基本的な姿勢とは、「菩薩の心の淨らかさに従って、仏国土も清浄となる」と説示される内容であらう。つまり、清浄莊嚴なる仏国土はもともとかなたの世界に実体として存在するものではなく、それはいわば衆生の心に応じておのずから顕現するもので、またそのような心のあり方をもってはじめて建設されなければならないとされる。このプロローグにはもとより本經の思想的立場を未然に示唆しようとした意図がこめられているわけであるが、維摩居士その人の登場は第二章（「方便品第二」）において記され、しかもそこには病床の身にある維摩の姿が示されている。もちろんこの病いとは方便力のものでいわゆる仮病である。しかしそれは、一切衆生の苦悩をその身に荷して、みずから衆生とともに苦しむ病もうとする維摩の菩薩道の実践を説き明かしている。ここにこの物語の発端がある。

そこで第三章（「弟子品第三」・「菩薩品第四」）では、仏陀が諸弟子菩薩に対して、維摩への病氣見舞いを要請するくだりとなるわけであるが、今、諸弟子菩薩というのは、登場するかれらのいずれもがかって維摩の説法にやりこめられたにが体験をもっており、次々に仏陀の依頼を断わるからである。すなわち有名な仏陀の十大弟子がまず指名され、さらに

は弥勒菩薩以下の諸菩薩までが順次登場し、だれもが過去のにがい思い出を振り返って、そこでは才知と弁才とにたけた維摩のすぐれた人格があらわに知らされるばかりである。こうした成り行きから、結局は文殊菩薩が病氣見舞いに行くこととなる。そして第四章（問疾品第五）から第九章（「香積仏品第十」）までが本経の核心であり、維摩と文殊の奔放闊達な問答がくり広げられる。

ところでこれに先立って第四章の導入部で維摩は、大勢の聴聞者に囲まれてやって来る文殊を迎えるに際して、神通力をもってその病室（方丈といわれるが——）のベッド一つを除いて部屋をまったくの空虚としてしまっている。もとよりこれも主題である空思想を表現する一つの示喩的な比喻であるが、ここに二人のはてしなき深遠な問答が展開する場面はすべて整ったのである。

こうして二人がかの部屋に対峙した時、なにもないその部屋の有様に驚く文殊を前に、維摩が最初に述べる挨拶が、今冒頭に引いた「よく来られました。文殊師利よ……」というくだりなのである。それにしてもこの言葉の諧謔性はどのよう

に評したらよいのか。一体、維摩は何を述べようというのか。梵語原典の残っていない維摩経では、ほかに西蔵語訳が伝えられているが、この箇所は余り理解しやすい訳文とはいえない。やはりここは、漢訳三本（呉支謙訳、姚秦鳩摩羅什訳、唐玄奘訳）中の羅什訳がもっとも理解しやすい。すなわちそれが上掲のものであるが、まさしく『金剛般若経』をはじめとする般若經典の思想表現にまったく通ずる論理方法であり、「禅的な風格」を感じさせる趣旨であるともいわれる（長尾雅人博士評）。またここで、玄奘訳ではさらに加えて「まだお話を」お聞きしないままにお聞きしますね」と続けているのも面白い。そして文殊がこの挨拶に答えて、「あなたのいわれる通りです。維摩居士よ。もし来たならば、再び来ません。もし過ぎ去ったならば、これも再び過ぎ去りません」と述べるのも教訓に満ちた応答である。

ともかく矛盾と逆説の錯綜した表現は本経のきわめて常套的な論法であり、空の世界を明かす論理的基調でもある。もとより維摩の病いそのものが事実ではなくまったくの虚偽であり、そのことを十分にわきまえた文殊との対論にいかなる意義があるのか。そもそもそうした二人の質疑応答の最初の言葉が先に掲げた一節なのである。そこに二人の対話篇がただならぬものであることが必然的に予想される。いずれにしても以下にくり広げられる様々なるエピソードも、空の思想を表現する手立てにしかすぎない。

法然上人靈場めぐり 第十一回 村上博了

第二十番札所

京都京極

誓願寺

草派本山となり現在に至っている。

二

法然上人二十四歳の時、求法のため叡山黒谷を出て洛西嵯峨清涼寺三国伝来国宝釈迦如来前に一七日間参籠された、ついで南都の碩学藏俊僧都に求法されたのである。当時法相宗は天台真言兩宗に伍する一大宗派であり僧都はその中心高僧であった。勅修御伝に、

第廿番札所は、三論宗碩徳高麗僧惠遠隠師が、天智天皇の御旨を拜し大和国奈良に創建と伝えられる誓願寺である。平安奠都のため山城乙訓郡西の丘に移転、又小川の西に再転、天正年中、豊臣秀吉公が京都区劃整理に当り、三条南京極に移転、それが現在地である。

南都法相宗の碩学藏俊僧都が当寺一代となり、僧都が法然上人に深く帰依、上人を当寺中興開山上人と仰いだ寺院である。後に西山深草派祖円空(立信)が住職して以来は、西山深

宗義につき不審をあげられけるに、僧都返答におよばざることどもありけり。上人こころみに独学の推義をのべ給いければ僧都感歎していわく、貴房はただ人にあらず、おそらくは大権の化現か、昔の論主にあいたてまつるとも、これにはすぐるべからずとおぼゆるほどなり、智慧深遠なること、言語同断なりとて、二字をたてまつり、一期の間、毎年に供養をのぶること、をこたりなかりけるとなんと伝える。一期の間供養とあることは、その後面語と交誼がつづいたことを物語る。誓願寺中興上人と仰いだことも暖か



法然上人の説法された処

〈知恩院所蔵〉

い帰依信頼と敬崇の念があいつづいていたからである。

三

御詠歌は、

極楽は 是るけき程と ききしかど

つとめていたる 所なりけり

という。極楽は十万おくの彼方と伝うとも、毎日称名念仏すれば、必ず往生ができると如来の御本願念仏の功德をたたえている。寺は火災のため天明、弘化、元治、大正、昭和二年七年と炎上するに至った。

什宝として、国宝誓願寺縁起、牧溪と元信の画幅もある。

市バス、市電は河原町三条下車が便

第二十一番札所

洛北大原

魚山
勝林院

一
第廿一番札所は、現在京都市左京区大原勝林院町にある勝林院である。開山上人は天台宗円仁（慈覚大師）であり、円

仁が承和二年入唐、大源で仏教学と声明を修めて帰朝、洛北大原の土地が、中国大源と似ているとし草庵を建立、地名を大原と呼び声明の道場とした、魚山と云う名称は、中国仏教のメツカ五台山の魚山名を名乗ったのである。長和二年寂源再興、声明の本山とし大原流又は魚山流と云い、教界声明の名門となった。

本尊阿弥陀如来は座像丈六康尚の傑作元文二年香雲改造、脇土は左畏沙門天王右不動明王である。胎内仏は阿弥陀如来三体あり二体は各自厨子入であった。堂の左り奥に法然上人伝自作像がある。隣壇に阿弥陀如来立像あり二蓮台を踏んでいる。大原談義の時、法然上人の説に応じ「そうだそうだ」とみ足を踏み出された御姿と伝えられる。

二

法然上人と勝林院との関係は文治二年秋のことである。上人の浄土宗開宗十二年目に当る。のちの天台座主顯真法印に請ぜられ出離の要道、沙石集に云う「如法の後世物語」が行われた。勅修御伝はその概況につき、

文治二年秋の頃、上人大原へ渡り給う。東大寺の大勸進俊乗房重源、いまだ出離の道を、おもい定めざりけるを哀み給うて、この由を告げられたりければ、弟子三十余人を相具して大原に向う、勝林院丈六堂(本堂)に会合す。

上人の方には重源以下の弟子ども、その数あつまれり。法印の方には、門徒以下の碩学ならびに大原の聖達座しつらなれり。山門の衆徒をはじめ見聞の人おおかりけり、論談往復すること、一日一夜なり。

上人は、法相、三論、華嚴、法華、真言、仏心等の諸宗にわたりて、凡夫の初心より仏果の極位に至るまで、修行の方軌、得道の相貌、つぶさにのべ給うて、これらの法みな義理ふかく利益すぐれたり。機法相応せば得脱くびすを廻すべからず。ただし源空がとき頑愚のたぐいは、更にその器にあらざるゆえに、悟りがたくまどい易し、しかる間、源空発心の後、聖道門の諸宗につきて、弘く出離の道をとぶらうに、かれもかたく、これもかたし。これ則ち世くだり人おろかにして、機教相そむく故なり。しかるを善導の釈義、三部妙典の心、弥陀の願力を強縁とする故に、有智無智を論ぜず、持戒破戒をえらばず、無漏無生の国に生れて、ながく不退を証すること、只これ浄土の一門、念仏の一行なりとて、法藏比丘の因行より、弥陀如来の果徳に至るまで、理をきわめ詞をつくしおわりて、只これ涯分の自証をのぶるばかりなり。また上機の解行をさまたげんとするにはあらず、とのたまひければ、法印よりはじめて満座の衆、みな信伏しにけり。



法然上人が念仏の功德について対論された処

〈知恩院所蔵〉

と伝えている。

一日一夜に至り、各宗の教義を挙げて出離の要道を詳しく講説した、満座の人々感銘し、

形を見れば源空上人、まことは弥陀如来の応現かとぞ感歎しあいける

と感激したのであった。主催者である法印は、

香爐をとり、高声念仏をはじめ行道し給ふに、大衆みな同音に念仏を修すること三日三夜、声山谷に充ちひびき林野を動かす、

と云う大法悦である。信を發し縁を結ぶ人多かった。

願真は翌文治三年正月十五日から、当道場で不断念仏会を開白し、五坊を立て、一向称名念仏道場とされたのである。

三

御詠歌は、

阿弥陀仏に そむる心の 色にいては

秋の梢こずえの たぐひならまし

と云う上人の御歌である。

如来のご本願お念仏の有難さ尊とさ、ただ唱うれば、誰でも如来の大明明に救われる法悦は、秋の梢の紅葉のように、自然に如来の本願念仏を同唱五色の雲におおわれる。洛北の大原は古来紅葉の名所である、寺名の勝林のように、上人の

化導によってよき念仏同行人となる霊場である。

附近に、三千院、寂光院、来迎院、古知谷阿弥陀寺等。順徳天皇、後鳥羽天皇陵もある。

京都バス大原下車が便

第二十二番札所

京 都

百万遍 知恩寺

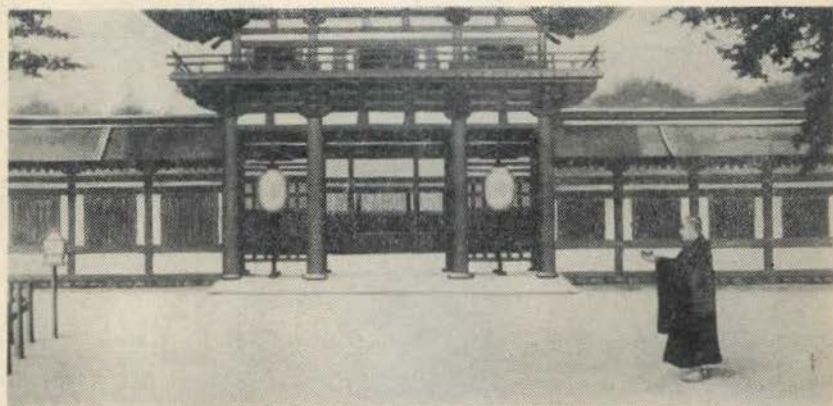
第廿二番札所は、現在京都市左京区田中門前町にあり、大本山百万遍知恩寺（百山・功德院）として有名である。法然上人は専修念仏弘通のため京都各地に伝導された、そうしてその地人の要望に答えては移住教範を張られたのである。当霊場も又その一つで加（賀）茂の河原屋（神宮堂）と云われた遺跡である。これについて伊藤祐晃上人は知恩寺略志に「賀茂の河原屋は、いま北小路今出川即ち相国寺の地にして、當時一条以北は九重の外にして賀茂の河原なり、よって賀茂の河原屋といい、慈覚大師が彫刻したまえる釈尊の像を安置せ

り。故に世人これを今出川釈迦堂又は賀茂禪房と称したり。その釈尊の聖像は今現に知恩寺釈迦堂丈六座像の本尊これなり」とその沿革を伝える。

上人は、兼実公邸に近いこの禪房にあること年久しく、念仏の道場とし、伝化の坊とし、自行化他の度ごとに、賀茂社に参詣された、その道筋を世人は「法然みち」と呼び、上人が用いられた「あかの井戸」が相国寺中松島軒に残って、今尚法然水と云われている。

同寺二世は上人高弟勢観房源智上人であつた、建保年間に知恩報恩のため、法然上人御影堂を造つて、知恩寺と号したことが寺名の発端である、勅修御伝に「暦仁元年十二月十二日頭北面西にして念仏二百余返、最後には陀仏の二字ばかり聞えたまひけり」と神宮堂功德院で、大往生せられた聖地でもあつた。

当寺は足利義満が、長慶天皇の弘和三年（一三八三）相国寺を此所に建立に当り、一条通り小川の西、堀河の東一条の北に移建、ついで三十二世聖伝（奉養）の付、豊臣秀吉公の帰依を得て、寺町に輪喚の美をきわめた諸堂を建立したが、寛文元年正月十五日御所内からの火災のため類焼、改めて神楽岡の西北の地田中に替地をいただいたのである。住職満霊（光誉）の時であつた。



法然上人の知恩報恩の為に勢観房源智が開かれた処

〈知恩院所蔵〉

満靈上人は衆人と共に芒々とした荒地を拓き鎮守堂、釈迦堂、勢至堂、念仏堂、書院方丈、総門、御影堂（東西十五間、南北十三間）等を造建、後世中興上人と仰がれる。

二

百万遍と公称したのは八世善阿空円の代であった。元弘元年七月疫病大流行、後醍醐天皇は深く慙念、諸寺諸山をして祈禱せしめられたが応驗がなかったのである。浄土宗にも鎮護国家の法あるときこしめし善阿上人に祈らしめ給う。善阿一七日を期し宮中に於て百万遍念仏会を修行靈驗あり、天皇より百万遍の寺号と空海筆利剣名号、大念珠を賜ったことから、百万遍知恩寺と呼び百山と愛称される。昭和五年善導大師一二五〇年遠忌記念に世界一の大念珠を作られ御影堂にかけられている。

御詠歌は、

われはただ 仏にいつか あふ日ぐさ

心のつまに かけぬ日ぞなき

と専修念仏者の希望と喜びの毎日を物語る。念仏行は毎日一段と張りがでることを物語る。什宝平家の重宝松蔭硯、御下賜百万遍大念珠等。

市バス・市電百万遍行百万遍下車が便



仏説無量寿經 卷下(四)

村瀬 秀雄

一 自他相哭のすがた

生死常道転相嗣立。或父哭レ子或子哭レ

父、兄弟夫婦更相哭泣。顛倒上下無常

根本、皆当ニ過去一不レ可ニ常保一。教語

開導信レ之者少。是以生死流転無レ有ニ

休止一。

生死の常道はうたたあい嗣立す。あるいは父は子を哭し、

あるいは子は父を哭す。兄弟夫婦はたがいにあい哭泣す。顛倒上下は無常の根本にして、皆はまさに過ぎ去るべく、常に保つべからず。教語し開導すれども、これを信ずるものは少し。これを以て生死の流転は休止のあることなし。

(意訳)

生死の常道は代々受け継いで今日に到っている。或いは父親は子供に先立たれて慟哭し、或いは子は親を亡くして嘆き悲しむ。同じく兄弟、夫婦も死なれて互に泣き叫んでいる。順序や年齢の上下が逆になって死ぬことのあるのは無常の世の中の原則であって、誰もかれもこの世を去ってゆき、いつまでも寿命を保っているわけにゆかない。しかし無常迅速の理を説いて聞かせ仏の道に導こうとしても、この道理を信ず

る者はまことに少い。そのために生死流転のすがたは止るところがなく、この悲しみから抜け出せない。

二 造悪受苦のすがた

如レ此之人朦冥抵不レ信三経法一、心無二

遠慮一各欲二快意一。癡二惑於愛欲一不レ

達二於道德一、迷二没於瞋怒一貪二狼於財

色一。坐レ之不レ得レ道、当下更二惡趣苦一

生死無中窮已上。哀哉甚可レ傷。

かくの如きの人は朦冥たい突して経法を信ぜず、心に遠慮がなくのおの快意せんことを欲す。愛欲に癡惑せられて道德にいたらず、瞋怒に迷没して財色を貪狼す。これによりて道を得ずして、まさに惡趣の苦にかえり生死はきわまりやむことなかるべし。哀れなるかな甚だ傷むべし。

(意訳)

このような人々は無明という愚痴に遮られて邪見を起し、仏の教えを信じようとしなない。遠く将来まで考えをめぐらすことがないから、人々は後世の苦報に留意しないで誰も現世

の快樂を追求してやまない。或いは愛欲の道にまどい溺れて魔惡修善の道を求めようとしない。或いは忿怒の泥沼に迷いこんだり、財産や色欲を狼のように貪っている。こうしたわけで生死を出離する道を得ることができずに、やがては地獄餓鬼畜生のいずれかの世界に生れて苦しみを受け、いつまでも生死流転の世界にさ迷って解脱できないでいる。こうしたすがたは誠に哀れであり、心の傷む想いがする。

三 親戚相憶のすがた

或時室家父子兄弟夫婦一死一生、更

相哀慙恩愛思慕憂念結縛、心意痛著

迭相顧恋。窮レ日卒レ歳無レ有二解已一。

教二語道德一心不二開明一、思二想恩好一

不レ離二情欲一、昏朦閉愚惑所レ覆。不レ

能下深思熟計心白端正專精行レ道決中斷

世事上。便旋至レ竟年寿終尽不レ能レ得レ

道。無レ可二奈何一。

あるときは室家父子兄弟夫婦の一は死し一は生き、たがいにあい哀慙し、恩愛し、思慕して憂念が結縛し、心意は痛著してたがいにあい願恋す。日をきわめ歳をおえて解けやむことのあることなし。道徳を教語すれども心は開明せず。恩好を思想して情欲を離れず。昏瞢が閉塞して愚惑の覆う所なり。深思し、熟計し、心を自ら端正にし、專精に道を行じ、世事を決断すること能わず。便旋としておわりに至り、年寿は終尽すれども道を得ること能わず。いかんともすべきことなし。

(意訳)

あるときは同じ家族で父子、兄弟、夫婦の一人が死し、一人が生き残ることがあって互いに悲しみ悼み、恩愛の情にかられ、思慕の念がわき、憂いの念がまつわりついて離れず、心を痛めて恋い狂うようになる。いかに月日を過し年を経て、この思いは解消することがない。たとえ仏の道を説き聞かせることがあっても、愚痴の心は少しもなおらず、恩愛の好みの情にとらわれて愛欲の情から離れることができないで、愚かさの暗闇に閉ざれて惑うばかりである。本来ならば深く思慮をめぐらし、じっくりと計画をたて、自らの心を整え、専心に努力して仏道を行じ、世間の難事を思いきって捨てるべきであるのに、こうしたことは一向にできない。毎日

をさ迷い廻っているうちに終りが近ずき、やがて寿命が尽きるけれども、遂に道を得られないままである。もしこうなれば如何ともすることができないのである。

四 造惑受苦のすがた

総猥褻擾皆貪ニ愛欲一。惑レ道者衆悟レ之者寡。世間忽忽無レ可ニ憐頼一。尊卑上下貧富貴賤勤苦債務各懷ニ殺毒一、惡氣竊冥為ニ妄興事。違ニ逆天地ニ不レ從二人心一、自然非惡先隨与レ之。恣聽ニ所為ニ待ニ其罪極一。其寿未レ尽便頓奪レ之、下ニ入惡道ニ累世勤苦。展ニ転其中ニ數千億劫無レ有ニ二期一。痛不レ可レ言甚可ニ哀慙一。

総猥褻擾にしてみな愛欲を貪る。道に惑える者はおおく、これる悟る者はすくなし。世間は忽々としてりょう頼すべきものなし。尊卑上下貧富貴賤は勤苦し忽務して、おのおのは殺毒を懷き、惡氣は竊冥として妄りに事をおこさんとす。

天地に違逆し人心に従わずして自然の非惡はまず随つてこれにくみす。ほしいままに行為をゆるして、その罪の極まるを待つ。その寿はいまだ尽きざるにたちまちこれを奪つて、惡道におとし入れ累世に勤苦せしむ。その中に展転して数千劫に可期のあることなし。痛みはいふべからずして甚だ哀慙すべし。

(意訳)

人々は乱れに乱れ、みな愛欲を貪っている。道に惑う者ばかりが多く、道を悟っている者はまことに少い。世間の人々は生活の営みに忙しく、頼みにできるものを持っていない。尊い人も、上の者も下の者も、貧しい者も富む者も、貴い人も賤しい人も皆一樣に仕事に追われて忙しく、おのおのは甚だ邪惡な心を懷いている。人々の惡意は奥深く暗くたちこめて、無闇にことを構えようとする。そのため人々は天地の道理に逆き、人間本来の心に従うことをしない。従つて非業や惡業が自然に人に随ひ、つきまとうことになる。自分勝手な行為を平氣で行ひ、そこからくる罪報が極まり来るのを待つてゐるようなものである。こんな具合で、まだ壽命が尽きていないのに突然命終し、惡道に落し入れられ、世々にわたつて限らない苦しみを受けさせられる。惡道の中を転々と廻り、数千億劫という永い間に及んでも遂に抜け出すことがで

きない。その痛ましさは言葉でいい尽せず、甚だ哀れであるという外はない。

五 言行一致で善を積む

吾助レ爾喜。汝今亦可三自厭二生死老病痛苦一。惡露不淨無二可レ樂者一。宜二自決斷一。端レ身正レ行益作二諸善一、修レ己潔レ體洗二除心垢一、言行忠信表裏相応。人能自度転相極濟、精明求願積二累善本、雖二一世勤苦須叟之間二後生三無量壽仏国一快樂無レ極、長与二道德一合明永拔二生死根本一、無二復貪患愚癡苦惱之患一。欲二寿一劫百劫千万億劫一自在随レ意皆可レ得レ之。無為自然次二於泥洹之道一。汝等宜三各精進求二心所願一。無レ得三疑惑中悔自為二過咎一。生二彼辺地七寶宮

殿一、五百歳中受三諸厄一也。

われ汝を助けて喜ばしむ。汝はいま亦自ら生死老病の痛苦を厭うべし。惡露不淨にして樂しむべきものなし、よろしく自ら決断すべし。身をただして行いを正しくし、ますます諸善をなし、己れを修め、体を潔くして心垢を洗除し、言行は忠信にして表裏は相応すべし。人はよく自ら度し、うたたあじょう濟し、精明に求願して善本を積累せば、一世の勤苦は須臾の間なりといえども、後には無量寿仏の國に生じて快樂は極まりなく、長く道須と合明し、永く生死の根本を抜き、また貧患愚癡苦惱のうれいをなからしむ。寿は一劫百劫千万億劫ならんと欲せば、自在に意に随つて皆これを得べし。無辺自然にして泥洹の道に次げり。汝らはよろしくおのおの精進して心の所願を求むべし。疑惑し中悔して自ら過咎をなすことを得ることなかれ。かの辺地の七宝の宮殿に生ずれば五百歳の中にもろもろの厄を受けるなり。

(意欲)

われ(釈尊)は汝(弥勒菩薩)に教えを説き、汝に喜びを与えるであらう。汝もまた自分から生死老病という非常な苦しみを嫌つて、今こそ苦から離れなければならぬ。この世には惡が露骨に現われ、煩惱という不淨に満ちているので、樂

しむべきものは何もないのである。是非とも自分で決心し、次のようにしなければならぬ。即ち身を整えて行いを正しくし、ますます多くの善を行い、教えを學んで修行し、欲の汚れをなくして煩惱の垢を洗いおとし、言葉と行為には真心を尽して偽りがなく表裏は常に一致するようにしなければならぬ。人はまず自身で修行し道を得てから他人を救済するのである。人々を教化しようという願いを清く明らかにおこし、善根功德を積み重ねるならば、この世の努力や苦勞がたとえ短いものであつても、次の世には無量寿仏の極樂淨土に往生できて、そこでは極まりない快樂を受け、長く涅槃の徳を身につけ、永遠に生死流転の根本を断ちぎり、従つて貪り怒り愚かさからくる苦惱を受ける心配がなくなる。極樂淨土での寿命は一劫でも百劫でも千万億劫でも、望みに従つて自由にいか程でも長いものとすることができる。極樂淨土は際限なく自然にこの境地となるのであつて、悟りの境地に次ぐものである。汝らはよろしく精進努力して悟りを求める願いをおこさなくてはならない。仏の智慧を疑わず、修行を途中でやめず、自ら過ちを犯すようなことがあつてはならない。もし仏の智慧を疑う者があれば、その者は辺地の七宝宮殿に生れ、五百年の間は仏にあうことができないという厄難にあふことになるのである。

念佛ひじり三国志

(八)



——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

遊蓮房円照が老朽の根方に、愛人貴子の無惨な死体を発見したのは、翌朝のことであった。

昨夕、何処へゆくとも告げずに貴子は姿をかき消した。事故だ——

円照は直感した。お互いのこまやかな愛情から考えて、失踪蒸発は問題外である。一睡もしないで、山や谷をさがしまわった。

疲れた足を引いて、すでに朝の光りが満ちた庵房へ戻った。ひと眠りしてから、とごろり身を横たえた。閉じようとする円照の眼に、新居の壁に設(しつ)らえた棚が映じた。

猿酒の壺がない。

じつはその壺、父の信西が秘蔵していた唐三彩だ。平治の乱の折、父が殺されたあと円照が姉ノ小路の邸から官憲の眼をくぐって持ち出したものだった。

黄、褐、藍の三色が、混然と配色された万年壺であ

る。西安や洛陽の貴人たちが他界したとき、葬礼のために作られ、墳墓へ納める明器であった。どのような経路をたどって父の手もとに入ったのか、円照は知らなかった。

とにかくこの美しい唐三彩壺は、円照の庵房において唯一つの贅沢品と言ってよい。猿酒の香気で結ばれた円照と貴子。

彼女はあれ以来、いつもこの壺で自然酒を汲んでくるならわしだった。

その壺がない。

円照は猿酒が醸成されている老枿を思いうかべた。まだあの辺りを探索していなかったのだ。

がばとハネ起きると、庵房を飛び出していった。

円照は老枿の根方に立ちすくんだ。

何たる無惨！

貴子の白い裸身には、まだ生色が残っていた。朝露に濡れて透明な輝きがあった。

しかし生前の苦悶をそのまま刻みつけた形相は、ふた目と見られない。眼窩は空らにひろがり、唇から醜く白い歯がむき出ていた。

豊饒な神秘を宿した女体であった。円照がその一つ一

あらすじ

西山広谷の草庵に二人の念仏信者はかく結ばれていた。ひたすらに道を求める貴子に、円照の教えはますます熱がこもった。だがここに、近くの草庵に修行する荒法師上りの義信房の存在は、二人の間に暗い影を落していた。そんなある日、この広谷を法然が訪れる。円照と貴子の心情を見通した法然は、「いまのお二人は、まじりつ気もない愛情で結合されている。それが何の罪でございましょうか」と明確に言い切る。法然の慈愛に満ちた人柄がこの草深い庵を大きく包み込むが如くであった。そして西光法師の寄進で円照らに新しい房舎がもたらされたのも、それからまもなくであった。しかしこうした喜ばしいでき事の背後にはすでに悲しい運命が隠されていた。つまり、あの芳醇な猿酒を提供した老枿の下で、貴子が義信房の手によって無残な最期を遂げるところになってしまったのである。

つに夢を感じ、人間の悦びを汲み上げてきた美の源泉であった。

どこも廃墟だ。可憐だった顔容は悪鬼の相となり、豊かな太腿は硬直して廢木のように投げ出されている。

その奥、やわらかな体毛でおおわれた神秘的な部分は、死の直後に発したと思われる脱糞で、いぎたなく汚れていた。

内臓の機能が停止したあとの人間の醜くさ——

わずかに乳房から頭へかけて、水々しいふくらみを残していたが、そこには黒い草蛇の死骸が魔の烙印のように長々と身を投げ出している。

この草蛇に襲われて。

瞬間、円照が直感したのも当然だろう。

貴子には蛇姓と化した皇円阿闍梨との過去がある。その夫を裏切って円照と結ばれたことへの復讐。

しかしこんな草蛇に、女の身ぐるみを剥ぎ取ったりする能力や慾念があっただろうか。

禽獣の凶器は自己防衛の場合にだけしか行使されない。淡白で、すつきりとしている。被害者の死相は安らかで、ある種の美すら描き出すはずだ。自然な闘争の結末だからである。

これほどの無惨！

これほどの醜悪！

人間の手になった作品以外の何ものでもない。

憎悪、呪い、恐怖、欲望……人間だけがいだく悪の精気がこんなむごたらしい作品をこしらえてしまうのだ。それと……円照は死者の周辺をゆっくり点検した。

どこにもないのだ。あの唐三彩の壺がないのだ。

円照の脳裏で、推理が組み立てられた。

貴子は昨夕、あの壺を抱いて猿酒を此処へ汲みにきたに違いない。何者かに襲われたのだ。

殺人者のねらいは、高価な壺であったか。美色な肉体であったか。

前者とは考えられない。唐三彩の価値を知る者が、こんな山家に、いや現在の都ですら何人もないだろう。やはり通りかかった山の賊か携夫あたりが貴子の身体をねらったに違いない。

証固を拭き消す目的、とは言わぬまでも物珍らしさで壺や着衣を奪い去ったのであろう。この事実だけを考えたも犯人が山の賊だと判断しないわけにはいかなかった。

円照は、いったん庵房へもどると、水桶を手にした。谷へ降りて水を汲んだ。貴子の死体を丁寧に洗いはじめた。

脱糞で汚れた太腿をぬぐい、頭部の碎けた草蛇を、かたわらの土に埋め、空らにひらいた臉を閉じてやり、苦勞して喰いしぼっている歯を、唇でくるんでやった。さてこの死体を、どう処置したものか、と円照は思案

にくれた。やがて思いついて、庵房へとつかえした。

人影が庵房の前に三つ四つあった。

「どうなさった？ 信濃どの」

西光法師であった。庵房の落成を検分するために従者を連れて都から登ってきたところだと言う。

「じつは……」

と、事件の顛末を告げた。

西光法師は円照のあとについて老朽のところまできた。

「おいたわしや院の方」

と、しゃがみこんで合掌した。

西光は貴子とすでに何度か面識があった。院の御所時代になっていたころもそうだが、この西山へ登ってきたときにも円照にあらためて引き合わされ、二人の間柄を聞かされていたのだ。

「花山院へ運ばねばなるまい。お父上の前ノ相国に引き渡すべきじゃろう」

「いや」

と、円照は首を振った。

もはやこの女人は太政大臣の姫ではない。出家をとげた尼である。自分の仏弟子、さらには最愛の念仏同心で

もある。

「庵房のかたわらにでも埋葬してやりたい」

「それもそうな」

「花山院どのお引き渡しをするのなら、念仏ひじりになる前だ。今なら死者となったものを」

「わかった、信濃どの。では庵房へお移し申上げよう」

西光は従者を促した。

「ちよつと待て」

と、円照は死体のかたわらにしゃがみこむと、いま庵房から持参したニビ色の僧衣を、ふわりと裸身へかけてやった。念仏ひじりらしい往生の装束でおうてやりたかった。

二

「その犯人は、必ず露顕する」

と、西光は言いきった。

貴子の死体を庵房の裏山に埋葬し、誦經のあと遊蓮房円照が唐三彩の壺の話を洩らしたときである。

「どこの痴れ者、山の賊か知らぬが、そんな高価な壺を手に入れば、必ず都へ売りに出る。それとなく触れを

＜貴子の死＞



まわしておきましょう」

さすがは長年、検非違使だった西光である。推理の読みには筋が通っていた。

遊蓮房円照の明け暮れは、心豊かであった。

この心境は、彼自身にもいささか意外である。

愛人貴子を喪なって、さぞや悲しく寂しいきわみと思っていたのだ。ところが生前の愛執は嘘のように消えて、もっと広々とした天地のもとで、貴子と愛を語り合えるのだ。

語り合うその言葉とは、単調そのものの称名念仏であった。

いや、少しも単調ではない。

南無阿弥陀仏――

ひと声称えるごとに、裏山の土中から貴子の澄んだ声音が響きかえってくるように実感できるのだ。

自分だけではなかった。称名念仏を続けているうちに、その声は完全に密着した二人の声に変っている。

どんなに愛し合っている、生きた人間には感情の起伏があった。生前の貴子との明け暮れで、この感情が小さな隙間風を吹きかよわせる事実を、円照は否定できなかった。

ささいなことで貴子を憎んだこともある。溺愛しすぎるおのれに、白けた感慨を持ったこともある。言葉のやり取りがお互いに疏外感をいだかせたりした。

いまそんな來雜物がすべて取り除かれてしまったのだ。もの言わぬ貴子は、完全な愛人、完全な同心の形で、つねに円照の肌近くで実在した。

念仏する者の功德――

遊蓮房円照はもの静かに、心豊かに、この美味を味わいつくしているのである。

貴子が死んで十数日が過ぎた。西光法師の使者として若い男が登ってきた。あの壺らしい品が都のさる貴人のもとへ持ちこまれたのだ。実物かどうか確認して欲しい、という通報であった。

「その貴人とは――」

「五条大納言さまとか、うかがっております」

使者の六位は答えた。

「邦綱卿か」

なるほど唐三彩壺ほどの名器が売りさばかれる先は、大福長者の五条大納言邦綱あたりしかあるまい。黄金や銅銭がうなっているのだ。

関白忠通の雑仕にすぎなかった邦綱が、一代で財

をなし、その財をもとにとんとんと出世してきた裏には日本の貨幣経済史が強い裏付けとなっている。

奈良朝のころ盛んに流通したこの国の貨幣は平安期にはいると遷息した。その鑄造元であった唐が乱れて、流入が止まってしまったからだ。日本自身には貨幣鑄造の設備がなかったのである。物々交換の原始経済に戻った。

安祿山の乱れなどがようやく鎮まって、大陸には新國家の宋が建国した。

関白忠通邸で各地の莊園事務を処理していた邦綱は、東北地方に産する砂金に眼をつけた。しばらく大陸への渡航が停止していた留学僧にこの砂金を運ばせることにした。俊東房重源などもその留学僧の一人であった。

茶、陶器、綿の織物など新しい文物との交換もあったが、邦綱がねらったのは宋の銅銭だった。

貴族たちは新しい文物に眼を奪われて、銅銭の価値に暗かった。邦綱が銅銭を蓄積しはじめても非難しないばかりか、むしろさげすんで嗤った。

貨幣は生きものである。いや、逞ましい生きものとしての機能を、摂関政治が衰退し、平氏を筆頭とした武士

という中流階級の抬頭とともに、天下に発揮しはじめたのである。

この平安末期に流通拡大の兆しを見せた日本の貨幣経済は、鎌倉期が極点に達した。十三世紀の末、宋の銅銭と交換するために輸出された日本からの砂金や金塊は中国の全産額を超え、またおびただしい流出で、宋では銅銭が不足してしまったとも言われる。

五条大納言邦綱は、こうした日本経済史の曲がり角に立って、一挙に飛躍をとげた武器を手にしない梟雄である。

あとの話になるが、治承四年（一一八〇）時の大権者平清盛は、待望の直孫安徳天皇を帝位に就かせる。即位の費用一切を大納言邦綱が賄ったばかりか、即位式の間まで異例の大納言邸がえらばれたのである。

さて、遊蓮房円照は、その日の夕景、西光法師にとまなわれて五条の大納言邸へ出かけた。

「大福長者こそあの名器が持ちこまれる先とわしはにらんでいたのです」

道すがら西光はおのらの眼力の正しさを誇った。

「それで、売りこんだ賊は？」

「ご心配なく、ちゃんと正体は判っております。だがその前に唐三彩の壺が信濃どの所持品かどうか、確認をしなければならぬ」

西光と肩を並べて大納言邸へ向う遊蓮房円照は、やはり一抹の感慨にとらわれた。

あの平治の乱を思いうかべるのである。

父の信西入道を異にかけた陰謀の主を、この西光は父ともどもに口汚たなく罵ったではないか。彼らが口にした名前こそ邦綱。当時の右京大夫だったのである。

西光の言葉を聞いていると、近ごろ西光と邦綱とは満更の仲でもなさそうである。

政治はつねに二律背反の動き方をする。お互いの利益が優先してしまう。西光には昔の憎悪なぞとくに消えているのだろう。現実だけが生命だ。

政界から完全に遠のいて、沙門の身となった自分の、これははかない感傷なのだろうか、と円照は自嘲した。

二人が五条邸へ到着したとき、折しも大門から美々しい牛車をかこんだ堵列が流れ出てくるところであった。

「これはいけない」

と、西光は円照の袖を引いて、路傍に控えた。頭を垂れて牛車を見送った。

「どなたのお乗りものかな」

円照の問いに、

「中宮——」

短く西光はささやいた。

高倉帝の女御徳子であった。平清盛、最愛の娘である。

牛車が遠のくと、西光は口汚たなく罵りはじめた。

「平相国の奴、中宮さまの懷妊を一日千秋の思いで待っているんです。ご懷妊になって、またその皇子が帝位にでも就くようになったら、この国の政道は終ります」

五条大納言との関係では柔軟な政治家の姿勢を示す西光法師だったが、平清盛だけは許せないらしい。

現に平徳子は治承二年に安德帝を産み、その前年、西光法師は清盛のために斬られるのである。

三

中宮徳子が今日の午後、大納言邸でゆっくりと茶の饗

応を楽しまれた、と邦綱は満足気に語ったあと、

「そうか、是憲どのはあの唐三彩の壺をたしかめにおいでになったのだな」

と、なつかしげな眼を円照へ向けた。

「はい。ちと仔細があつて」

「いや、あれは間違ひなくおぬしの所持品じや」と断定する。

「なぜ——」

「なぜならもとはわしのものな。亡くなられたお父上に進呈した品だからじや。是憲どのは、姉ノ小路の邸にあったものをお持ちになったのじやろうが」

そこまで言われれば一点の疑念も残らない。しかし念のために現物を、と邦綱に従つて座を立った。

最近新築した仏殿の方に壺は飾つてあるという。

長い渡り廊下を歩いた。足もとには蓮池がひろがる。

小造りの方円の仏殿。しかし内部は贅美を凝してあつた。

本尊阿弥陀仏のかたわらに置かれた壺。まさしく唐三彩であつた。

「おう」

と、円照が驚きの声を放ったのは、壺のせいではなかつた。仏壇の横に一人の僧が端座している。

法然房ではないか。

「お知り合いか」

邦綱は二人の僧を見比べた。

「はい、ずっと親しく」

「それは丁度良かった。わしはこの法然どのを戒師として、ただいま円頓戒を受戒しているところなのじゃ。天下無双の戒師、と俊乗房が言っておったが、この法然どの、その触れこみ以上に当代並びなき善知識じゃ」

邦綱の褒め言葉が、円照の胸にぐーッときた。

「触れこみ……とはどういうことでございますか」

「いや、例えばの話でな。この法然どのは決して触れこみとか、売名をしたわけではない。それをやったのは俊乗房重源で」

いかにも政商らしく邦綱は、話題に屹立しようとする
「角」を巧みに削り落してゆく。

法然房はそんなやり取りの間、終始黙りこんでいた。表情は硬直してもおらず、さりとてへつらいの影なぞ微塵もなかった。淡々と坐っているだけであった。

「ところで是憲どの。東大寺の明遍僧都。あの人はたしか御辺の実弟であられたな」

「さようで」

「この春から己講として最勝講へ出講してもらうことで決定したんじゃ」

「明遍が最勝講に？」

「うむ。年は若い、三論の学究としては当代無双。さすがは信西入道のわすれがたみ。是憲どのとおぬしはあの兄弟中でも抜群の秀才と聞いておる。ちつとは宮廷で榮達をはかれたら、どんなものじゃ」

「出家してまで榮達とは、どういうことでしょうか」

「さあ。そんなかた苦しいことは言わないで」

「僧侶がかた苦しくなくて、誰がその道を守れましようや」

マシメ一方の円照には、邦綱もそれ以上言葉のつなぐすべを知らなかった。

やがて邦綱は唐三彩の壺を円照に手渡した。

「亡きお父上に進呈した品が、盗品となって再びわが手もとへ戻ってくるいうのも奇妙な因縁よなあ」

円照の口辺には、ごく自然に冷笑がこぼれていた。

「壺が、何か復讐を企らんでいるのではなからうか」

「壺が復讐を……壺にまでおびやかされていたのでは、わしら如きは枕を高くして眠ることすらできぬわい」

仏殿を去るとき、円照は今宵は姉ノ小路の旧邸に泊るゆえ、必ずお立ち寄り下され、と法然を誘った。

法然は例によって、おおらかな笑みを満面にたたえな

＜法然と円照の対話＞



がら、うなずいた。すでに彼は、円照の愛人貴子が不慮の死を遂げたことを知っているはずだ。当然その問題について、語り合わねばならないのである。

「さて師光どの」

大納言邸を出ると、円照は西光法師を昔の名で呼びかけて、話の核心に触れていった。

「あの唐三彩の壺が」

「さよう。誰が大福長者に売りこんだのであろうか」

「それじゃよ。出所はいとも不可思議なところから」

「と申すと——」

「信濃どのの足もとじゃ」

「えっ」

「同じ西山広谷に棲むひじりなのじゃ」

「では義信房」

なぜそんな名前が口をついて出たのか、円照自身にも解明がつかなかった。

「いかにもその義信房じゃ。いちおう桜町の中将を介して、ということになっているが、わしらの調べで、すぐに判った

「あの義信房が……」

怒りと憎悪が円照の胸をふさいだ。

意地で、狷介傲慢な義信房が貴子を凌辱して、殺したというのであろうか。

「まだ本人と直接会って、たしかめてはおらぬ。しかし、そうときまれば信濃どの。必ず泥を吐かせてみせませうぞ」

検非違使の峻烈な取調べは、あまねく天下に知れわたっている。この西光法師は実行するであらう。

「お願いする。貴子にあのような仕打ちをした凌辱者は絶対に許すことができぬ」

「お引請け申した」

西光は胸を叩かんばかりにして承諾するのであった。

その夜陰、法然房源空が姉ノ小路の旧信西入道邸——現在は西光法師の邸に円照を訪ねてきた。待ちかねていた円照は、さっそく法然を邸内へ招じ入れた。

ひとしきり話題は、貴子の衰えな最期について語られた。語っているうちに、円照はやはり涙している自分を知った。そくそくと愛恋の思いがこみ上げてくるのだ。

死の顛末に関する話が一段落したとき、法然はもの静かに語りだした。

「私の父は、美作の国久米郡の押領使でした。漆間時国という名です。丁度私が九歳のときでした。同じ郡内にいる明石定明という武士の夜討ちに遇いました。定明がなぜ父を殺しに來たのかは知りませぬ」

「なるほど」

「父は息を引き取る寸前、私に遺言致しました。必ずこの仇は討ってはならぬと」

「必ずこの仇を討てとか」

「いいえ、討ってはならぬと」

「奇体な。武士たる者が屈辱の仇を討ってはならぬとは、何ごとか」

「私にもわかりませぬ。これが父の口から聞いた最後の言葉でございます」

「……………」

「その後十三歳で私は比叡山に登りました。年を一つ取ることには父の遺言を思いかえしてきました。なぜ親の仇を討ってはならぬのだろうか」

「なぜだろう」

「最近になって。やっと父の心根がわかりました」

「どうわかったのだろうか」

円照は鋭い眼つきで、じっと法然を見すえている。

浄土宗の宝物



奈良県当麻寺は古義真言宗と浄土宗の二宗派によって相営まれ、一年交代の輪番制である。もとは四・五十ヶ寺にも及ぶ山内寺院があったが、今は浄土宗所屬寺院としては奥院、護念院、念仏院、極楽院、千仏院、宗胤院、紫雲院、来迎院の八ヶ寺があり、真言宗は中之坊、西南院、不動院、竹之坊、松室院の五ヶ寺がある。その中、法然上人二十五霊場の第九番目に指定されている奥院は、当麻寺の奥院ではなく、浄土宗総本山知恩院の奥院として開創されたもので、本山よりもたらされた宝物は数多い。南北朝の頃、京都は戦乱の災過におおわれ、知恩院の貴重な宝物を

当麻寺 奥院

疎開せずにはいられなかったようだ。知恩院第十二世誓阿上人（一二九七—一三七四）により、この当麻曼荼羅ゆかりの地に創建されたのである。

この奥院は曼荼羅堂の後方にあり、当麻寺の中で一番高地にあり、四季を通じてすばらしい景観である。境内には法然上人御影堂（本堂）を中心として、阿弥陀堂、納骨堂、方丈、書院、庫裡、棧門が建並び、宏大、荘麗な美観を呈している。

御影堂の本尊である法然上人座像は、重要文化財で、鎌倉期のすぐれた彫刻である。墨ぞめの衣に袈裟をつけ、両手で珠数を繰って

いる様子は、大原問答のいでたちと同様に、法然上人のきどらぬ姿が偲ばれる。そこには温顔をはいしているかと思うと、衣の刻には鋭い刀法が見られ、鎌倉時代独特の現実さと力強さがうかがわれる。

法然上人行状絵図（四十八巻）は、同じく重要文化財で、鎌倉時代絵巻物の中の最高で、絵は土佐吉光、詞書は伏見、後伏見天皇と公卿たちの染筆と伝えられ、五〇〇メートル以上に及ぶ大作である。もと知恩院に正副二本所蔵されていたうちの副本を、誓阿上人が法然上人木像と共に、奥院へ移されたものである。本年知恩院の正本（国宝）が浄土宗開宗八百年を記念して東京、京都国立博物館にて全巻が公開された。その他奥院の宝物として選沢本願念仏集（京都嵐山寺所蔵の「選沢集」に次ぐ貴重本として浄土宗宝に指定）、瑠璃舍利堂（法然上人の御遺骨を納めていた壺）、松蔭硯（平家物語にもこの硯の由来が記されている）、押出銅造三尊仏（重要文化財、天平時代のもの）、俱利迦羅電時絵経箱（国宝、平安時代のもの）、等数多くの宝物を有している。

（後藤尚孝）

当麻寺奥院

円光大師像

(重文鎌倉時代)



「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円

(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円

(送料不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十九年十一月二十五日印刷
昭和四十九年十二月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

お年賀の施本にご利用を

昭和50年度 『浄土宝暦』

B 6判 40ページ 一部単価 35円
(200部以上 33円 送料実費)



「浄土」トラクト

新刊 『五重相伝の手引』

A 5判 16ページ 一部単価 85円
(200部以上 80円 送料実費)

本年は浄土宗の開宗八百年正当の年であり、全国の各寺院では慶讃の記念法要が誠に盛大にとり行なわれた模様でした。大変よろこばしいことであり、念仏信仰の教えが広く津々浦々にさらに行き届いたことと推察されます。こうした良風をより一層進めるために各寺院ではさらに様々な企画を準備されていると思います。そのなかで、五重相伝会などの大行事を修される折の、一つの施本としては是非ご利用下されば幸いです。



好評 『法然上人と浄土宗』

B 6判 96頁 定価180円 (〒70円)
(200部以上 単価160円 送料実費)

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。併せて念仏信者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。



〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番